

平成 22 年度 卒業論文
日本一の幸せ者を探せ

所属ゼミ 村澤ゼミ
学籍番号 1060401039
氏名 片山 裕善

大阪府立大学経済学部

要約

ヒトが持ち得た「幸せ」という感情は、あくまでも個人の内から出た主観的な訴えであり、それゆえにヒトの幸せは、客観的な指標を作り出して測定することが困難である。しかしながら私たちヒトは、他人と共に幸せを分かち合うことが出来る以上、ある一定の所までは指標を作り出し、それを基にして幸福度を測ることが可能であると考えられる。例えばそれは結婚経験の有無であったり、お酒を嗜むのかといった趣向や、生まれ持って出た性別の差等によって決定しているのかもしれない。

本稿では大竹(2005)・小林(2010)の研究を踏まえ、統計ソフトと実際の大規模全国調査アンケートの結果を利用して、幸せの要素となるものを探り当てることを目的とする。また、どのようなヒトが幸せを勝ち取っているのか、「日本の幸せ者」はどんな人物像なのかという「幸せの指標」を掴み取り、自らの自己実現に繋げるとともに、近年脚光を浴び始めた「幸福の経済学」という分野の進展にも貢献したい。

上記に挙げた研究目的の下に回帰分析を行った結果、日本で最も幸せを感じるための要素は「結婚・家族・健康・九州・相対的な所得の差」であるとのデータが得られた。

はじめに

本稿では統計ソフト `gretl` と実際の大規模全国調査アンケート JGSS(2000-2003)の結果を利用して、幸せの要素を探り当てることを目的とする。上記に挙げた研究目的の下に回帰分析を行った結果、日本で最も幸せを感じるための要素は「結婚・家族・健康・九州・相対的な所得の差」であるとのデータが得られた。

以下目次の後

目次

幸福の経済学

先にも述べたが、近年では幸福と経済学を結びつける分野の進展が目覚しく、人々の幸福度を考える上で、「何が幸福の要因となっているのか」を調べるために、経済学が用いられた先行研究も多々存在する。

大竹(2005)は、阪大の COE が独自に行った大規模アンケート調査の結果を利用して、人々が不幸になる要因を探っている。大竹(2005)の特徴は、とりわけ危険回避度や時間割引率といった「選好パラメータ」と幸福度との相関に重点を置いて分析を行っている点にある。これは、投稿者が行動経済学分野の研究者であることによる。また、小林(2010)では本稿と同様に JGSS のデータを利用し、貧困と幸福度の相関に着眼点を置いて検討している。具体的には、日本国内における都道府県レベルの貧困と人々の幸福度の相関を分析し、更に所得の再分配により貧困度が改善した際の人々の幸福度の変化を検証したものである。

本稿ではこれらの先行研究を元に、これらの結果とも照らし合わせながらデータを検証し、幸せ者の人物像の姿に迫りたい。

JGSS 概要

JGSS とは **Japanese General Social Surveys** の略語で、日本人の意識や行動を総合的に調査することを目的とした大規模社会調査アンケートのことを示す。以下に JGSS に関する具体的な詳細を記すものとする。

JGSS のデータは調査年度によって質問項目が異なるが、毎年同じ内容を問いかけている設問が大半を占めている。調査対象は満 20～89 歳の男女であり、サンプルの抽出方法は層化 2 段抽出法をとり対象者を決定している。層化は、全国を北海道・東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の 6 ブロックに分け、各ブロック内で市郡の規模に応じて政令指定都市、その他の市、市町村の 3 つに分ける方法をとっている。データの回収方法は、面接法と留置法を組み合わせたものである。回答者の質問項目へのより正確な回答を得るために、複雑な設問は面接法、容易なものやプライバシーが求められる設問は留置法によって回答を集めている。また、毎年同じ内容を問いかける質問には回答者の性別や年齢などといった基本属性が含まれ、そうでない質問に関しては、調査時点において世間で注目されている時事に関する質問が盛り込まれている。例えば、2002 年度の調査項目にあるギャンブル・カジノの設問が他年度に比べ、より詳細に詰問している事の背景には、'02 年当時の東京都石原都知事が「お台場カジノ構想」を発表し、国内カジノ合法化に向けて都庁内でカジノのデモンストレーションを行った、といった社会的背景が存在する。

1972 年より、アメリカのシカゴ大学にある **National Opinion Research Center** が、総合社会調査として **GSS(General Social Surveys)** と呼ばれるものを発行し続けているが、JGSS はこれの日本版にあたるものである。日本版である JGSS は 1998 年にプロジェクトがスタートし、調査が始められてから間もないが、その調査項目は就業や世帯構成から死生観、政治意識に至るまで幅広く網羅されている。

なお本研究においては、幸福度に関するデータを集めることを主目的として掲げているため、幸福度に関する回答が最も多く得られた、2000 年、2001 年度の調査データを使用することとする。

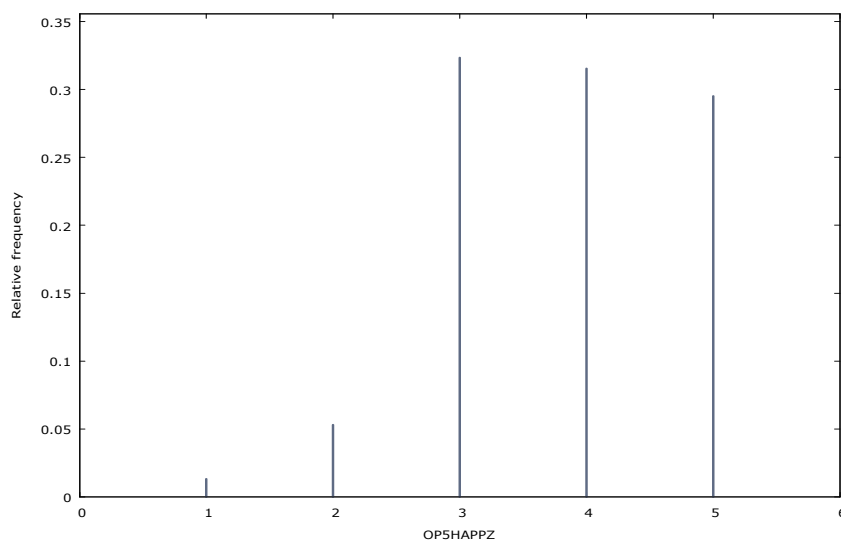
説明変数

幸福度に関して

JGSS の中で幸福度に関しては、留置調査票において設問項目が設定されており、基本属性の位置づけとして毎年回答者に尋ねる項目となっている。回答者は「あなたは、現在しあわせですか。」という問いかけに対し、5段階評価で回答することになる。この設問から、5を選んだ人が不幸で、1を選んだ人が最も幸せ者である、という結果が読み取れる。しかしながら、本研究の分析では不幸な人の姿ではなく、「幸せ者の人物像を探る」ということを目的として掲げている。その為、便宜上変数を調整、1から5に対応する数値を反転させ、1を選んだ人が不幸で5を選んだ人が最も幸せ者である、とした。

なお、2000年度の当設問に対する有効回答数は2893件、2001年度の有効回答数は2790件となり、本分析で用いる両年度の回答を併せた分布を表した結果が、下の図に示されている。これによると、人は「自分が不幸である」というよりも「自分が幸福である」と感じる傾向の方が強いことが分かる。この結果は、大竹(2005)にある大阪大学COEによるアンケート調査結果、「くらしの好みと満足度についてのアンケート」とよく似たものが得られている。なお、同アンケートでの幸福度への有効回答数は4187件であり、本稿で用いるサンプル数と比較しても、同程度のものである。

図 一 幸福度と該当者の分布



データの加工

今回のように、アンケート調査の結果と統計ツールを利用してデータを分析する際には、準備段階として「収集データの加工」という行程を踏まなければならない。この行程を終えて初めて、正しいデータ分析を始めることができる点には十分留意すべきである。なお、gretlの最新版においては同作業がJGSSデータを導入した後でも容易である。本稿での具体的な作業内容は(1)欠損値を除外する(2)説明変数の回答項目にダミー変数を割り当てる(3)必要に応じて新しい変数を定義する、の3つである。

(1)に関して、JGSSの設問による回答には「無回答・非該当・答えたくない」など、分析課程に含めると不具合が起こることが予測される様な、所謂「欠損値」というものが存在する。それらの回答項目はgretlで分析前に欠損値として指定し、除外する必要がある。

(2)について、本稿では分析に順序プロビットモデルを利用することを先に述べたが、その為には回答項目にダミー変数を割り当てる行程が必須となる。

最後に(3)だが、本稿の「幸福度」に関する記述の箇所でも述べているが、JGSSでの幸福度に関する変数op5happzは1が幸せ、5に近づくほど不幸である、と定義されている。しかしながら、1が不幸、5が幸せである方が直感的にも分析結果を検討しやすいと思われる。そのため新たな変数OP5HAPPYZを用意し、同変数の定義式を $OP5HAPPYZ = 6 - op5happz$ とすることで幸福度と回答項目の値を反転させた。これにより、分析に使いやすい幸福度の変数を準備することができる。なお、年代ダミー変数に関しては一度全ての年齢に対してダミー変数を割り当てている。そして新たな年代ダミーを作り出し、定義式に回答者が各年代かどうかの判定基準となるものを設定した。

順序プロビットモデル未完

先に統計ツール `gretl` を用いた分析を行う旨を述べたが、ここでは分析で利用するモデルについて述べてゆく。まず、本稿の目的は幸福度と様々な変数の相関を見ることにある。変数同士の相関を見るために、`gretl` では一般線形回帰モデルや多変量線形モデル、制限従属変数モデルといった幅広いモデルの推定に対応しているが、本稿では制限従属変数モデルの中に含まれる、順序プロビットモデルを用いた分析が好ましいと判断した。その理由は、①被説明変数(幸福度)が離散的な値をとっているため、被説明変数が連続的な値をとることを前提とした OLS 推定での推計ができない。②被説明変数(幸福度)が質的変数である、の 2 点が挙げられる。ここで、順序に応じて与えられている数値間での絶対的な差に意味合いがないことには注意をする必要がある。例えば、幸福度の設問において 1 を選んだ人と 5 を選んだ人との間では、幸福度が 5 倍違うのかと言えばそういうわけではない。

順序選択モデルでは、連続的な潜在変数 Y^* が説明変数 $x = x(x_1, x_2, \dots, x_n)$ を用いて、 $Y^* = b \cdot x + \varepsilon$ (b : 係数ベクトル、 ε : 誤差項)

と表されるものと仮定する。被説明変数と潜在変数の関係は、「閾値メカニズム」によって、

$$Y = j \Leftrightarrow k_j < Y^* \leq k_{j+1} \Leftrightarrow k_j - b \cdot x < \varepsilon \leq k_{j+1} - b \cdot x \quad (j = 0, 1, 2, 3 : k_0 = -\infty, k_4 = \infty)$$

のように対応づけられるものとして、このような関係を満たす閾値と係数ベクトルを最小 2 乗

推計によって決定する。これらの推計にあたって一般化線型モデルが用いられることとなるが、このとき、 $Y = j$ となる確率 $P(Y = j)$ は

$$P(Y = j) = F(k_{j+1} - b \cdot x) - F(k_j - b \cdot x) \text{ と表現される。}$$

ここで、 $j=1,2,3, F(-\infty)=0, F(\infty)=1$ 、また、閾値をきめるために説明変数には通常定数項は含めない。確率分布関数として正規分布を選べば順序プロビット・モデルになり、ロジスティック分布を選べば順序ロジット・モデルになる。

基本推定結果

考察

参考文献

謝辭